

# TOPIC 親の思い、子の思い

## 親子でがんばるオイスカマン！

50年の歴史を持つオイスカには、親子2代、あるいは3代でこの仕事に携わる人たちがいます。背中を見せてきた親の思い、それを見て育った子どもの思いはどのようにつながっているのでしょうか？インドネシアと日本で働くインドネシア人親子の思いを聞いてみました。

構成・文：林久美子（月刊「OISCA」編集部）

### 娘 シスカ

オイスカ歴 3年・24歳  
オイスカ本部 人材育成部

2004年、静岡県にあるオイスカ高校に編入、06年に卒業。帰国後は会計やコンピューターを学び、父の仕事のサポートをしながらオイスカ活動に参加。ジャカルタ事務所で会計などを経験し、11年10月、現職に就く。3人姉妹の長女。

### 父 スワント

オイスカ歴 30年・51歳  
オイスカ・インドネシア ジャカルタ事務所 所長補佐

1982年、高校卒業後、ジャカルタにあったオイスカ研修センターにて農業研修を受ける。83年に初来日。愛知県の岡崎（現：中部日本）研修センターをはじめとする国内の研修センターで農業を学び、帰国後オイスカの職員に。92年には琉球大学でマングローブについて学び、インドネシアのマングローブプロジェクトで活躍、現在に至る。



シスカ(中央)の卒業を祝う両親と妹たち

## 父の思い

—お嬢さんが昨年から日本に来ていますが、さみしくありませんか？

もちろん家族が離れて暮らすのはさみしいことですが、娘が私と同じオイスカで、しかも日本で仕事をしているのは誇りでもありますし、とてもうれしいことです。私は生涯の仕事としてこの活動に取り組んでいますがもう年ですから、やはり後継者を育てないといけません。3人いる娘のうち少なくとも誰か1人はオイスカで仕事をしてみたいとずっと思っていたので、シスカがこの道を選んでくれて

本当にうれしいですね。彼女は長女ですから妹たちも続いてくれたらいいんですが。

—お父さんから強くオイスカへの就職を勧めたのでしょうか？

いえ、私は「オイスカで働きなさい」と言ったことはありません。もちろんそれは望んでいましたが、決めるのは本人ですから。シスカは奨学生としてオイスカ高校で勉強させてもらったので、そのことに対する感謝の気持ちを忘れないように、オイスカへの恩返しができる人生を歩

むようにということは話していません。最終的に決めたのは彼女自身です。

—お嬢さんの名前はS-I-S-C-Aと綴りますが、O-I-S-C-Aと一字違いですね

S-I-S-C-Aは、インドネシア語のS-I-S-W-A O-I-S-C-Aを短くしたものです。S-I-S-W-Aは生徒とか研修生という意味ですから、S-I-S-W-A O-I-S-C-Aはオイスカ研修生ですね。私自身が研修生として2回目の訪日研修を受けていた時に生まれた娘なので、この名前を付けました。

—お父さんの願いが込められた名前ですね。今の彼女に望むことは？

とにかくいろいろなことを体験してもらいたいと思っています。名前の通り、いつもオイスカで「研修」して「学ぶ」つもりで仕事をして、それを通して成長してくれたらいいですね。



昨年5月、中野会長がジャカルタ知事表敬の折はスワント(中央)が通訳を務めた

## 娘の思い

—お父さんからオイスカのことを聞いて育ってきたのですか

それが、ほとんど聞いたことがありませんでした……というか、会話自体が少なかったです。父は私が生まれた時、日本にいました。一番下の妹が生まれた時もインドネシア国内の出張中でした。普段から家にはないことが多いし、家においても植物やバイクの手入れが優先で私たち娘のことは後回し。それでも小さい頃は、近くにあったオイスカの研修センターに遊びに行ったりして楽しかったことは覚えていますが、中学生ぐらいになってからは父のことを不満に思い、避けるようになっていました。



主な業務は研修生の入国や滞在に関する書類作成だが、小学校などで母国についてのレクチャーをすることも

## まだまだいます! 親子スタッフ

スワント・シスカ親子以外にも国内外の現場で「親子スタッフ」が活躍しています。ここでは四国研修センター（母）とフィジー研修センター（息子）で働く菅原親子の子の思い、関西研修センターで共に働く清水親子の親の思いをご紹介します。

### 子の思い

フィジー駐在代表代行 菅原弘誠

「同じ思いを共有することができた」。これが母親と同じオイスカにいる理由です。親が働いていなくても、今きつと自分はここで働いていたと思います。でも、僕にとってオイスカを「自然」な存在にしてくれたのが母であることは間違いありません。



女性生活改善コースの研修生に指導をする母・浩子(右)

今はフィジーで、母のいる四国研修センターを卒業して戻ってきた現地青年の活動を側面で支える仕事をしています。オイスカファミリーという言葉が職員の間でよく聞きます。家族でなくても家族のようなつながりがあるからこそ、異国の地でも頑張れるのだと思います。

### 親の思い

関西研修センター 清水利春



息子・久樹(右)にはまだ教えることがたくさんある

昨年度から初めて親子で同じ場所での勤務となりました。息子は、オイスカ高校・オイスカ開発専門学校で学び、西日本研修センター勤務を経て、(株)沖縄産業開発青年協会へ入隊しました。半年間の実習による経験を積んだのち、中部日本研修センターに勤務し、昨年関西研修センターへ異動となりました。まだまだ一人前ではありませんが、多くを学び、経験を積んできたことは事実です。オイスカの現場に携わる職員として、今までの経験を活かし研修生とともに成長して頑張りたいと期待しています。

### —反抗期ですね

そうですね。その頃は、母ともあまり話をしなかったように思います。でも親元を離れ、オイスカ高校で自分のことは自分でやる規律正しい生活を体験して両親への感謝の気持ちを持つようになり、父がなぜあんなにオイスカの仕事を頑張るのかが分かった気がします。高校を卒業してからも両親に話すようになり、日本に来てからも週に2〜3回、電話で話をしていきます。

### —なぜ、お父さんと同じオイスカで仕事を

留学前は、父を避けるようになりオイスカのこと嫌になりました。父が学校の行事に来たことがないのも、いつも家にいないのもオイスカのせいだと思っていました。その頃、日本人のオイスカスタッフから「帰国したらオイスカと一緒に働こう」と声をかけられ、心の中で「嫌だ」と返事をしたのを覚えています。でも日本で成長させてもらったんだと思います。オイスカのおかげで留学することができて、そのことに対する感謝の気持ちを強く持っています。だから、オイスカに就職することは

私にとっては自然な選択だったと思います。父と一緒に仕事ができるのは安心感もありましたし。

—お父さんの今の思いを聞いたことがありますか

いいえ。父がそんなに喜んでいては知りませんでした。でも、妹たちはどうでしょうか。私は留学させてもらったからこそ、父のやっている仕事を理解することができたので。父の気持ちを知ることができて良かったですが、でも、もつとちゃんと直接家族とコミュニケーションをとってほしいものですね。